■随想

「鎮國之山」の碑をめぐる書縁・人縁

中村梧竹・三島海雲と下伊那の人々

武藤高義（高8回）

東急東横線の代官山駅近くにあるカルピス旧本社ビルの玄関脇に「鎮國之山」なるブロンズの碑が屹立している。じつはこれはレプリカで、実物はいまは富士山頂の浅間神社奥宮に設置されている。富士山を賞揚したこの碑が、近代書道史で書聖といわれ、中国でも清朝末の宰相・李鴻章から、空海以来の書家と称えられた、中林梧竹の筆になるものであることは以前から聞いていた。カルピス社の社長に就任して間もない頃であったから、かれこれ十五年近く前のことになる。

来客を玄関口に送り出して、前から気になっていた「鎮國之山」の碑の裏側に回ってみた。建立は明治三十一年、協賛者・長野県下伊奈郡原九右衛門・木下與八郎とある。およそ百年前、郷里の人達が富士山に実物の碑を建てたことになるではないか。中林梧竹とこの碑を再建したカルピスの創業者・三島海雲。彼らと伊那谷の間にどのようなつながりがあったのか理解しがたく、時おり東京の展覧会に出品することもある田舎書家である郷里の妹に調べを依頼した。

一ケ月ほどして妹から次のような意外な報告があった。幕末動乱期の佐賀藩にあって、幼少より副島種臣と並ぶ逸材といわれた梧竹は書の道に進んだ。後援者の多かった伊那谷には数多くの遺作があるが、妹が書を習い始めたころ、あまりに個性の強い梧竹先生の作品の影響を受けぬよう指導されたこと。また木下、原両家はともに好学の素封家で、たまたま原家が近くであることがわかり、訪問して話を伺うことができたとのこと。

その結果、木下家についても判明したが、驚いたことに木下與八郎は初期の飯田町長で、私の中学・高校の同期生の木下喬夫君の祖父とのことであった。そこで早速、飯田高校の教諭をリタイアしたばかりの木下君と連絡を

●むとう・たかよし
1938年飯田市生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。味の素㈱へ入社。常務取締役を経て、カルピス㈱社長、会長を歴任。現在、同社相談役。民間外交推進協会副会長なども務める。

とったところ、「碑の話は聞いたことがある。たしか飯田の大火で焼け残った土蔵に関連資料があるはず」とのことであった。

「カルピス」の創業者、三島海雲

一週間ほどすると、鄭重な書信とともに、富士山頂に「鎮國之山」の碑を建立中の梧竹や伊那谷の人達と覚しき関係者の写ったセピア色に変色した写真が送り届けられた。

三島海雲は大阪・箕面の教学寺という貧乏寺の出身である。真宗の学校で学んだあと青雲の心もだし難く、大陸に雄飛して現地でいくつかの事業を手がけるが辛亥革命に遭遇し、志半ばにして帰国する。その数年前、内モンゴルに旅したとき、現地の馬乳酒を飲んで奇跡的に体力が回復した体験をもとに、帰国後、幾多の艱難を克服して発売したのが「カルピス」であることはつとに有名な話である。事業家として成功した海雲はその人柄から〝超俗の経営者〟と称されたが、富士山をこよなく愛し、晩年まで富士登山を慣わしとした。

代官山にあるブロンズ碑と筆者

あるとき、修業時代から崇敬の念を抱いていた中林梧竹の「鎮國之山」の碑が、富士山上に落雷で倒れたまま放置されていることを知り、修理・再建立したのにとどまらず、そのレプリカを作成して本社の敷地内に設置したのであった。ときに海雲九十二歳、没する二年前のことである。

ちなみに、富士山にこの碑が建立された明治三十一年は、海雲が西本願寺文学寮を卒業して山口県開導中学に英語教師として赴任した二十歳のときであった。この四年後に夢を抱いて大陸に渡ることになる。

また、中林家の遠祖は信州の出で、梧竹もしばしば信州を訪れていたこともわかっている。中林梧竹―三島海雲―下伊那の先達―学友と妹、繋がりがあるとは思えない人々が、梧竹の書が紡ぎ出した糸で結ばれていたということになる。この世でときに不可思議な縁（えにし）というものなのであろうか。